

ルソーについて(memo)

Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778

読書ノート

「ルソーの思想圏～「一般意志」の概念を求めて」（佐藤淳二）

アーレントのルソー批判の概要

「残酷さを平然と実行する主体のあり方」

ホロコーストとアイヒマン（冷酷さ）

アメリカ革命と指導者（コンパッション（同情）の欠如）

「ジャコバンの理論的基礎を一般意志論に見る」

批判の理論的根拠

<第1に> 普遍的であれば必然的に「単一」と見なされるメカニズム

<第2に> 「意志」の単一性

ところで、

個別利害と異なって、一般的な利害には「具体的対象がない」

アーレントは、ルソーの一般意志に経済的利害ないし貧民のルサンチマン
(ressentiment, 憎悪・ねたみ)しか見ていない。

「一般意志」の三類型

<弁証法的分岐> 全体と個別の統一

* 「神秘主義」（王の二つの身体、個別の王は死んでも王は引き継がれる）

全体と個別との神秘主義的な一致

「神秘的な身体たる一般意志は、「公共の広場」で討議ではなく賛成の拍手に
よって具体化する「自然的な身体」を必要とする。

* 共同主観性 ← 一般意志の概念化

バリバール

主体が主体となる（人民が人民主権を確立する）のは「人間（オム）」が
「市民（シュトワイアン）」になることであるが、それは共同体（われわれ）に
媒介されてのことである」

<非弁証法的発想> 経験主義・科学モデルを包括

*

1) 微分法：思いつき以上のものではない

「個別意志から過不足分を相殺させて引き去ると差の総計が残るが、これが一般意志である」（ルソー、CSII-3）とは言うが

2) ベクトル量：意志に働く力の本体は自己愛、即ちループ。ベクトルで表せるか

[]上記2つとも、自己関係という一般意志の根本的特性を捉えきれないという致命的な欠陥がある

3) ゲームと化学合成

一般意志のコンセプト（概念）へ

ブルーノ・ベルナルディ（B, Bernardi）の主張

ルソーの草稿の文献学に立脚し、化学合成が一般意志の基礎的な隠喩であると主張。すなわち、

共同体の各主体も（化学合成のように）、元素としての個性を残しつつ、共同体全体と自己関係することで、どの要素でもなかった性質を現実化する。この自己関係が「一般意志」の概念であり、その表現方法が「法」である。

ルソーの「利益（アントレ）」：二重（もしくは四肢的構造）

一方は、精神と身体を二極とする自己保全のための利害だが（アーレントはこれだけを見る）

他方には、「自己の自発性と他者の社会的事実性」という二極から生じる利益がある
後者は、根本的対立概念である自己愛と利己愛に対応する

「共同の利益（アンテレ・コマン）」が存立するのは、「特殊な利益」つまり、各個人の個別の利害関心がそれに敵対するからであって、この敵対の力をバネにして技術的に共通性を構成するというのが、ダルジャンソン侯註釈で暗示された利益のネットワーク化である」

【ダルジャンソン侯註釈】

「各人の利益は、それぞれ異なった原理を持っている。二つの個別の利益の一致は、第三者の利益との対立によって形成される」とダルジャンソン侯は言う。★すべての人の利益の一致は、各人の利益との対立によって形成される、とも彼は不言で来たであろう。仮に、互いに異なる利益が存在しないなら、共同の利益は何らの障害も持たないから、人々は共同の利益というものにまず気づかないだろう。すべては放っておいても進行し、政治は技術（アート）であることをやめるであろう（CSII-3）